

姉ならただのヤンデレ！

めたるみーと。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

兄s……姉さああああああああああんっ
!!!!!!

息抜き第二段。

例の如くキャラが崩壊しています。

さらにはオリジナル設定にクロスオーバー原作キャラ強化などなど酷いことになっています。

気にしないで読んでいただけると幸いです。

IS小説ですが、「文章力なんざ気にしないハアツ！」という人だけ見ていただければさらなる幸いです。

姉ならただのヤンデレ！

目次

姉ならただのヤンデレ!

クラス代表決戦。

校内のアリーナで向かい合う二人の人影。

世界で唯一、男のIS操縦者である織斑一夏。

イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。

互いににらみあう二人は、今か今かと開始の時を待っていた。

「よく逃げずに来れたものですわね。」

ま、その勇気だけはかつてあげますわ……所詮蛮勇でしょうけど」

嘲り笑うセシリアに対し、一夏は完全に冷静沈着。

それどころか、空中に飛んですらいない。

「あなた、なぜ飛ばないんですの？」

そんなことでは、私には勝てなくてよ？」

「……………」

そんな挑発にも聞く耳持たず、彼はただ待っていた。

その目は閉じられ、目の前の彼女など見てもいなかった。

「無視をするというならそれでいいですわ……………完膚なきまでに叩き潰して差し上げます!!」

手に現れた銃、スターライトmkⅢを一夏に向ける。

銃口は正確に彼に着弾しようとしていた。

しかし、その弾丸は彼に届かない。

素手で弾丸を弾き飛ばす。

全く身じろぎせず、且つ、セシリアを睨む眼をそらさず。

「ま、そのくらいはやってくれないとつまらない試合になってしまいますものね……………」

では、そろそろ行きますわよ？」

ブルー・ティアーズを展開する。

空中に浮遊する四機がセシリアの周囲を周回する。

「さあ、踊りなさいな！」

このわたくし、セシリア・オルコットと!

ブルー・ティアーズが奏でるワルツで!!」

「ふん……踊りは苦手だな……またにしてもらおうか、障害」
一夏は何も持たず、ただただ駆け抜けた。

「くっ！ちよこまかと……！」
セシリアは歯噛みしていた。
完全に翻弄されている。

空中に上がってこないながらも、彼はひたすらに回避し続けた。
シールドエネルギーもほぼ消費されていない。
むしろ疲れが見え始めているのは彼女の方だった。

「逃げてばかりでは、勝負はつきませんわよー！」
青い弾丸が一夏に切迫する。

その弾丸を、拳で受け流し弾く。

シールドエネルギーを最低限減らさぬように、ほんの一瞬触れるだけ。

「っ！」

強い。

この男は強い。

だが。

「認めてあげますわ……このセシリア・オルコットの倒すべき敵として……！」

これからは、わたくしも本気で参ります……どこまでできるか……楽しみですわねえっ!!」

ブルー・ティアーズのビットが動きを加速させ、さらに自分は銃を構えた。

これが、セシリア・オルコットの全力である。

B T兵器の演算処理を一部機体に任せる荒業。

合計数4のビットと、スターライトmkⅢによる乱射。

「ああああああっ!!!」

幾多の閃光が一夏に迫る。

その一つ一つを、丁寧にはじき返しては近づいていく。

どうやら、勝負をつけにきたらしいことがわかった。

しかし、セシリアは手をゆるめない。

乱射につぐ乱射。

閃光の雨の中を駆け抜け、セシリアに向かって跳躍する。

拳を振りかぶった。

しかし。

「かかりましたわねー！行きなさいーブルー・ティアーズー！」

ブルー・ティアーズは4機だけではない。

下半身に装着された砲身から飛び出す直射型のミサイル。

到底かわせる距離ではなく、セシリアは勝利を確信した。

「っ!？」

直撃する瞬間、無表情だった一夏の顔が、ゆがんだ。

『フォーマット、フェイズシフト完了。
一次移行完了』

「ふん……ずいぶんと待たせてくれる……まあ、いいだろう。」

間に合ったのだから別にいい」

下半身のみだった白い装甲が、透明になっていく。

まるで、氷のように。

「さて、ずいぶんと好き勝手にやってくれたものだ……が、セシリア・オルコット。

ここまでとは……正直予想外だった」

「そ、そんな……！」

まさかあなた、今まで初期設定で戦って……？」

俊敏で無駄のない動き。

それはISのハイパーセンサーのおかげでそうなっていたのだと思っていた。

しかし、初期設定ではそこまで大した補助は期待できない。

一夏は、自分の身体能力と、わずかな補助で回避を続けていたのだ。

「その通りだが……それがどうした？」

第一、時間がなかった。

ならばこの場でやるしかなかっただろう。

それに、俺はお前を初期設定のまま倒すつもりでいた。

まあ、予想以上の実力だったせいかな、こうして準備ができるまでかかってしまったがな……」

無表情のまま答える。

先ほどとは違い、殺気を抑えようともせず、ひたすらににらみつける。

「っ!？」

「では、いままでやってくれた礼に、見せてやるよ。」

俺の専用機をな」

にやりと歪めた口。

その表情は、彼女に恐怖を抱かせるのに十分だった。

透き通った氷を思わせる装甲が、日の光に照らされ輝く。

一夏は歪めた口を開いた。

「起きろ、 “ユキアネサ”」

氷が一夏の前に集まる。

ドームの地面から生えるように、十字の形に現れる氷。

その中には、青い鞘の刀のようなものがあつた。

「行くぞ、 障害」

一夏がその刀を取ると、氷はあっさりとは崩れ去り、一夏の手の中に刀が納まった。

バーニアを吹かすと同時、セシリアは銃を構える。

「(遠距離からの戦いでなら、ブルー・ティアーズの有利は確實……ならば十分に距離を取れば!)」

恐怖が、彼女の思考を逃げに走らせた。

だが、それは悪手であつた。

「氷翼月鳴」
ひよくげつめい

彼の刀が氷をまとい、弓を形どる。

射出される氷の矢。

あまりにも速いその矢をかわすことかなわず、ブルー・ティアーズが氷に包まれた。

「なっ!? これは!?」

絶対防御のシールドがなければ、彼女の肺まで凍り付かせるであろう冷気が、ブルー・ティアーズを包み込む。

そして彼女の機体は重力に逆らえず、落下していく。

「ぐうっ!? (バーニアが凍り付いている!? そんな馬鹿なことが!?)」

「凍てつけ」

地面から氷柱がせり出し、セシリアを貫く。

氷柱が崩れ去ると、自然落下を始めるブルー・ティアーズを、そのまま蹴り飛ばした。

「きゃああああああつ!!!」

シールドエネルギーがごっそりと削られていく。

警告のアラームが、セシリアの耳にこびりつく。

「っ!!」

もはや風前の灯火と化したシールドエネルギーと、凍り付いたバーニア。

それでも彼女はスターライトmkⅢを向ける。オルコツト家の現当主として、英国の代表候補生として、負けるわけにはいかなかった。

ブルー・ティアーズはもう残り一機。

最初の矢で、いくつか巻き込まれてしまった（もちろん一夏はセシリアとブルー・ティアーズが並ぶ瞬間を狙って射つたのだが）のだ。空を奪われ、牙を抜かれ。

それでもなおセシリアは立っていた。

「……………ふん……………」

その姿を見て、一夏は刀を構えた。

抜刀し、一撃で終わらせるつもりかと身構えるが、一夏はその刀を振りかざすことなく地面に対し垂直に構えた。

「煉獄氷夜」

失われる意識の中、セシリアには試合停止のブザーが妙にはっきり聞こえていた。

「あの愚弟め……！」

“世界最強” “ブリュンヒルデ” “戦乙女”

数々の二つ名を持つ織斑千冬。

今、アリーナを凍土へと変えた張本人、織斑一夏の実の姉である。

あきれ顔でアリーナにいる自らの弟を見る。

すると、一夏が確かにこちらへ近づいてくるではないか。

「山田先生」

「はっ！はい！」

「オルコットを頼む。」

あの冷気ではおそらく絶対防御も五分が限界だ」

「はい！」

あ、でも、千冬さんは……」

「なあに……弟に説教するだけだ」

そう言つて、彼女は観客席へ跳んだ。

観客席からアリーナへ、弟の元へ。

「姉さん！」

先ほどまでの無表情が嘘のように、嬉しそうに満面の笑みとなる一夏。

しかし、その表情には明らかかな狂気が浮かんでいた。

「やっと降りて来てくれたね姉さん！」

もう少しで、そっちに行くところだったよ！」

千冬はそれに対して無表情だった。

いや、無表情というわけではなかった。

眉間にシワを寄せ、一夏を睨み付ける。

明らかに怒ってますとといった表情だ。

「ふふっ……どうしたの姉さん？」

そんなに怒らないですよ。

僕は姉さんと戦いたかっただけじゃないか！」

「その為か？」

クラス代表での推薦を否定しなかったのは」

彼は、大人しく推薦を受けた。

それに食いついたセシリアは恐らく自分の実力を測るための生け贄。

初めて使うインフィニットストラトスの試運転代わりであった。いままでののはただの準備運動で、彼の本当の目的はそう。

「さあ、殺しあおうよ姉さん！」

「はあ……何故こうなったのだ」

わかりきったことだ。

構ってやれなかった小学生時代。

守ってやれなかったモンド・グロツソ決勝。

歪んだ愛情を、殺意を。

姉である自分に向けるようになったあの日。

後悔はある。

だが、弟を守れなかったのは事実。

だから、そんな弟の願いを断れない自分がいる。

「だが殺されるわけにもいくまい？」

片腕を失ったその日から。

守ると決めたのだから。

遅すぎるのは知っている。

でも、それでもしないと狂いそうだった。

「第666拘束機関解放……」

失ったはずの腕を構える。

弟に答えるために。

「次元干渉虚数法陣展開！」

“ブリュンヒルデ” 織斑千冬専用機。

もう一つの二つ名の要因となった“黒き蒼”。

「蒼の魔導書起動！」

